＜前回＞民衆・市民と新しい宗教性

１．中世社会の変動と新しい宗教性の展開：下部構造から上部構造？

・農業革命(11 世紀を中心に。二圃制から三圃制へ。犂や水車の改良)

→　都市（自治都市へ）の発展、都市同盟（ロンバルディア同盟、ハンザ同盟)、
交通路による都市の交流、

・都市民衆の宗教性　→　異端的民衆運動と教会の対応

十字軍（アルビジョア十字軍・1209-1229。アルビ派＝カタリ派）

新しい修道院運動・托鉢修道会（ドミニコ会、フランシスコ会）

異端審問制度

２．「十二世紀後半には」「それまで平信徒は宗教と信仰の問題を、教会に委ねておけばよいと考えていた」「けれども都市化の波をかぶった民衆は、そのような受け身の信仰生活によっては心の安らぎをうることができなくなった。」（坂口、31）

３．長期にわたるダイナミズムと安定度の高い構造性　→　スコラ的文化総合

４．ジャック・ル＝ゴフ『中世とは何か』藤原書店。

（１）中世都市と托鉢修道会・大学

ジャック・ル＝ゴフ『ヨーロッパは中世に誕生したのか？』藤原書店。

１．托鉢修道会

「教会の大問題は、グレゴリウス改革が未完成であったこと、異端が急速に広まったこと、それに金銭がますます流通し、富が価値として認められ、農村社会に結びついた修道院文化がもはや答えることのできないキリスト教徒のさまざまな要求が生じていた社会に、宗教が適応できなくなっていたことであった。これに答えたのは、新しいタイプの修道会を構成する何人かの修道士あるいは信徒たちであった。」(304)

「托鉢修道会はまた、とくに都市住民に対して熱心な説教をくりかえし、かれらに新しい宗教生活を教える。彼らとともに、言葉の、説得のヨーロッパが生まれ、これが世俗化されて、演説の、討論の、論争のヨーロッパとなるのである。」(307)

「説教によって言葉のヨーロッパの立役者となった托鉢修道士は、慈愛のヨーロッパの偉大な推進者でもあり、社会保障のヨーロッパの祖先となった。この制度は、「慈悲の活動」の名のもとに十三世紀に確立する。」(311)

「托鉢修道会の最後の特徴は、都会の信徒への関心の結果として生まれた、第三会の創設である。・・・家庭にとどまり自分の職業を続けながら、修道士たちの生活にできるだけ近い生活を送っていた。托鉢修道会は、創設者の意志にしたがい、三つの修道会を含んでいた。男子修道会、女子修道会」「それに都市社会において影響力を大幅に拡張していた第三会である。」「しかし、つねに支配的であったのは第一の修道会、すなわち男の兄弟たちと教皇庁であった。托鉢修道会は聖職者中心主義をのがれておらず、・・・急速に「直観による集まりから制度へと」変化していった。教会のメンバーとして信徒が進化したにもかかわらず、十三世紀は俗人のヨーロッパの形成には失敗したのだ。」(312-313)

２．ゴシックのヨーロッパ

３．労働そして経済活動

「十三世紀にはまた、労働という人間の活動には欠かせない領域において、心性とふるまいの重要な変化が目に見えるものとなった。」(319)

「労働を回避することで優越性を誇示していた社会階級――瞑想修道士や聖書者たち、あるいは戦士、騎士、貴族たちが、この有閑階級に属している――にとっては、社会や精神生活における労働の地位向上は痛手であった。」(320)

「労働に対するあいまいな態度をとる、労働の尊厳と不名誉のあいだで板ばさみとなったヨーロッパが、こうして生まれた。」(321)

（２）中世の秋・おびえる中世

４．戦争
「中世において戦争は、つねに多かれ少なかれ慢性的現象であった。」（335）
・エラスムス『平和の訴え』（1517 年）
５．ペスト
「十四世紀の半ばに、中世ヨーロッパの大惨事のひとつが起こった。ペストである。」（345）
「キリスト教世界の人口の半分から三分の二が死亡したとみてよいようである。」（346）
「ペストはまた新たな感性や宗教心をはぐくんだ。死についてそれまで人々が恐れていたのは、おもに地獄に落ちる危険であった。いまやこの恐怖を第一の段階が飲みこんでしまった。・・・死に関する新しい感性をいわば一手に引き受けることになったのは、死体であった。」（348）
６．暴力・暴動
「スケープゴートであるユダヤ人に向けられた憎悪」（352）
「政治権力が比較的脆弱」、「犯罪という新しいタイプの違法的ふるまいを出現させることになる。」（353）
「魔女迫害」「十四世紀以降、とりわけ十五世紀に、もうひとつの形の暴力が発達した。魔術の弾圧である。魔術に対する信仰、その実践はつねに教会の敵」（355）
「農民反乱」「中世末期の暴力のなかから浮かびあがるのが、農民、都市の工員、職人といった労働者たちの反乱である。」（357）
「都市の暴動」
７．教会の分裂
「教会大分裂」（364）
（３）新たな異端と新しい信仰（Devotio Moderna）
８．「ウィクリフとロラード派」（369）
「フス派」
９．下からの敬虔
「キリスト教信仰のある平和的進化について」、「「新しい信仰」」、「この精神的潮流は、ネーデルランドのデフェンテルの毛織物商人の息子である、ヘーラル・フローテの経験から生まれた。司祭であった彼は、一三七四年に財産を放棄」（373）
「司祭、聖職者、助修士を束ねる宗教的共同体である共同生活兄弟会を組織」、「風紀の改革を説き、聖職売買、禄の二重取りと闘い、助祭の同棲や、貧困の誓いを守らないことを戒めた。」
「この思想が扱う問題は具体的、日常的であり、勧める信仰はわかりやすく、実践的である。モデルは人間キリストである。」「トマス・ア・ケンピス（一四七一年没）の作とされ」た「『キリストに倣いて』」、「イエズス会の信仰内容の一部は、「新しい信仰」からもたらされたものであった。」（374）
10．トマス・ア・ケンピス『キリストにならいて』（岩波文庫）
（４）経済活動の展開
ジャック・ル＝ゴフ『中世と貨幣――歴史人類学的考察』藤原書店。
「商人の社会的地位、精神的地位がある程度向上したのと並行して、中世の人々の財布も生活も、つまり地上での富みも永遠の救済も守ろうとした教会が、貨幣に対する考えおよび実践を変えたのもあきらかである。」「筆者は中世の貨幣使用は贈与経済に含まれ、貨幣は神の恩寵への人間の全面的な服従に関わっていると考えていること」、「中世におけるこの世での貨幣使用を支配する考え方」「正当価格理論に見出されるような正義の追求」「「愛徳」によって表される精神的要求」(293)
「中世については 15 世紀末に至るまで、資本主義、さらには前資本主義でさえ問題には出来なかったということになる。」

11. 宗教改革の意義

（1）ルターの宗教改革

１．宗教改革の思想内容（三大スローガン）

宗教改革の思想内容については、改革者によって幅があり（例えば、聖餐論争）、簡単な要約は困難であるが、その共通項を宗教改革の三大スローガンと言うべきものに集約することは可能であろう。

「信仰のみ」（信仰義認論）、「聖書のみ」、「万人司祭説」

大切なことは、これら三つのスローガンが、それぞれ内的に連関し合っている点であり、ばらばらに理解すべきではない。

２．人間は何によって救われるのか？

・行為義認

人間は善行によって救われる。義人は救われる。何が善行であるかの内容は宗教において様々であるが（宗教儀礼に参加すること、隣人愛を実践すること、毎日祈り聖書を読むこと、献金を捧げることなどなど）、ほとんどの宗教において、行為義認に類した考えは確認可能である。

・問題は、人は救いに十分なほどの善行を実行できるか、あるいは救いを実感できるのかという点である。ルターは修道院で苦行を実践するが、ついに救いを実感できず、精神的に追い詰められる中で、善行による救いについて根本的な懐疑を至る。贖宥状への疑問はこの文脈から出されたものである。

贖宥（いわゆる免罪符）の論理： 天国／煉獄／地獄、聖人・教会・功徳

・ルターは、最終的に、人間の救いは心からキリストの贖罪を信じることによってのみ可能になるとの結論に到達する。これが、「信仰のみ」というスローガンで意味される信仰義認論である。このような罪と救いの理解は、新約聖書のパウロに遡り、アウグスティヌスの思想系譜に立つものである。

cf. 法然や親鸞の思想との比較。

・信仰義認論は、罪や恩寵についての実体論物的理解から、信仰者と神との関係論（罪や恩寵の精神性・内面性）への転換といえる。信じる心の純粋さという個人の人格性が問われることになる。

・もはや、救いは教会制度において媒介されるのではなく、神と個人との関わり合いにおいて成立することなり、またこの救いのあり方は、聖職者でも一般信徒でも変わりがないことになる。ここに、「万人司祭」説が帰結する。人間は救いに関しては、神の前に平等である。これは、イエスの宗教運動における徹底的な平等主義理論の具体化と解することも可能である。

・「信仰のみ」は救いが自己の信仰的決断の事柄であること、つまり自己決定の問題であることを意味する。そして、自己決定は情報公開が前提にされねばならない（宗教改革の精神はきわめて近代的である！）。この救いに関する知識の情報公開に対応するのが、「聖書のみ」のスローガンに他ならない。救いの知識は、権威ある他者から伝達されるのではなく、自分で聖書を読むことによってもたらされる。

５．「最初に存在していた宗教改革の感激は、間もなく燃えつきてしまった。共同体の生活は幾重にも沈滞したままだった。「キリスト者の自由」にふさわしく成熟してない人々は、ローマの政治機構の崩壊とともに、すべての教会的な支えを失ってしまったのである。ルター派の陣営においてさえ、多くの人々が、そもそも宗教改革によって人間はどれほど立派になったのだろうか、と自問する始末だった。芸術の世界において――音楽は別として――貧困化したことも見逃せない。」（ハンス・キュンク『キリスト教思想の形成者たち　パウルからカール・バルトまで』新教出版社、226 頁）

（２）宗教改革の歴史的位置

６．中世との連続性と断絶

「歴史的連続性の四つの線」（キュンク、199）

1)修道院のカトリック的敬虔。ルターは「カトリック的信仰から引き継いだ最高ののものを守り抜いた」「義認論」「ルターの修道院の上長で改革的な傾向のあった、ヨハンネス・フォン・シュタウピッツ」

2)中世的な神秘主義。「神秘家のタウラーを最も偉大な神学者の一人と呼び、彼を推薦しつづけた」「中世の神秘主義の伝統的な遺産」

3)アウグスティヌス神学。「ルターは、中世の神学の基本的な構成要素の一つ、つまりアウグスティヌスの神学との結びつきを保った」。「三位一体論」「キリスト論」「恩寵の神学」

4)オッカム主義。「オッカムやビールからルターの義認論に通じる道」

金子晴勇『近代自由主義思想の源流―― 16 世紀自由意志学説の研究』創文社、1987 年、
『ルターとドイツ神秘主義――ヨーロッパ的霊性の「根底」学説による研究』
創文社、2000 年。

７．宗教改革のプログラム

1520 年。宗教改革の綱領文書の成立。

説教『よきわざについて』（信仰とわざの関係）、『キリスト教界の改善について　ドイツ国民のキリスト者貴族に与う』（教会改革の包括的なプログラム、万人祭司制、修道的生活・祭司独身性・贖宥などの廃止）、『教会のバビロン捕囚』（サクラメント論）、『キリスト者の自由について』（義認理解の総括）。

８．宗教改革のパラダイム（キュンク）

1)神学の諸概念の変化（義認、恩寵、信仰、律法）あるいは放棄（アリストテレス的な自然学・形而上学の諸概念）。

2)伝統的規範・基準の移動：聖書、公会議、教皇の勅令、理性、良心。

3)伝統的な諸概念に基づくサクラメント論などの諸理論全体が、スコラ学的な方法論（思弁的・演繹的）が動揺。

↓

「聖書的・キリスト中心的な新しい神学概念」へ

1)神の新しい理解。それ自体の神ではなく、われわれのための神。

2)人間の新しい理解。義人であり同時に罪人。

3)教会の新しい理解。信仰者の万人祭司制を基礎とする、信仰者の共同体としての教会。

4)サクラメントの新しい理解。自動的に作用する儀式ではなく、キリストの約束と信仰のしるし。

↓

９．市民社会の宗教としてのプロテスタンティズム

「聖書のみ」の理念の実現のプロセスからわかるように、宗教改革の普及は、西欧世界の近代化プロセスと基本的に重なり合うものである。

聖書の近代語への翻訳　→　西欧国民文化の基礎

聖書の近代語への翻訳／印刷技術の普及と出版システムの確立

／初等教育の普及（識字率）

10．近代的な自律性や人格性（人権）といった理念の成立基盤

宗教改革の精神　→　自立した個人と自由・平等（理念）

西欧的な政治と経済のシステム

近代議会制民主主義（リンゼイ・テーゼ）

近代資本主義・市場経済（ウェーバー・テーゼ）

近代科学（マートン・テーゼ）

11. 近代的な世俗性への二面的な関わり

17 世紀までの過程の中で、近代世界の基盤（議会民主主義、資本主義、近代科学などの近代のサブシステム）は形成され、その背後に宗教改革的な精神性の作用が確認できる。しかし、一端成立した近代は、そのいわば母体であるキリスト教から自立し、それ自身の原理で動き始める（自律性、聖俗革命）。ここに、近代とキリスト教の二面的関係が成立する。とくに、18 世紀以降、近代精神はキリスト教への批判を強め（啓蒙主義）、キリスト教はそれへの対応を求められることになる。

18 世紀以降の動向は次のようにまとめられる。

・近代性への適合　→　世俗主義の台頭と譲歩
　　合理的な宗教思想（理神論やユニテリアン）

・近代的世俗性に対する批判運動（敬虔主義、メソジスト、ペンテコステ運動、さらにファンダメンタリズム）

（３）ドイツ農民戦争

12. 理念と現実の緊張

三つのスローガンによって示された宗教改革の精神は、「理念」であって、ここに、キリスト教史において広範に確認可能な理念と現実のずれを指摘しなければならない。たとえば、聖職者と一般信徒との平等性の理念は、宗教改革の伝統に立つ教会においても、必ずしも十分に実現されていない現実がある。階層的秩序は存続している。それは、信仰の自己決定と聖書の情報公開に関しても同様である。

13. ドイツ農民戦争の前史：１４世紀以来農民戦争は頻発
　　反封建的反教権的運動

14. ミュンツァー：ルターの宗教改革への共感と後のルター批判
　ドイツ農民戦争(1524.6 ～ 1525.11)、テューリンゲン蜂起、
　『シュヴァーベン農民の 12 箇条』

15. 黙示的終末論の伝統
　　霊的体験（スピリチュアリズム）:「選ばれた者たち」、「霊的人々」、内なる聖書、熱狂主義、禁欲的
　　終末意識：神意による大改革、アンチキリスト
　　民衆運動：伝統的な教会批判、平民主義、積極的な社会変革（農奴制の廃止、祖税負担の緩和）

16. 再洗礼派へ
　　セクト、厳格主義

17. マルクス主義による再評価

＜第一ヨハネ＞

2:18 子供たちよ、終わりの時が来ています。反キリストが来ると、あなたがたがかねて聞いていたとおり、今や多くの反キリストが現れています。これによって、終わりの時が来ていると分かります。19 彼らはわたしたちから去って行きましたが、もともと仲間ではなかったのです。仲間なら、わたしたちのもとにとどまっていたでしょう。しかし去って行き、だれもわたしたちの仲間ではないことが明らかになりました。20 しかし、あなたがたは聖なる方から油を注がれているので、皆、真理を知っています。21 わたしがあなたがたに書いているのは、あなたがたが真理を知らないからではなく、真理を知り、また、すべて偽りは真理から生じないことを知っているからです。22 偽り者とは、イエスがメシアであることを否定する者でなくて、だれでありましょう。御父と御子を認めない者、これこそ反キリストです。

（４）宗教改革と近代西洋世界

18．宗教改革と近代との逆説的関係：ウェーバー・テーゼの場合
　近代キリスト教における新しい職業倫理・労働観と資本主義の精神
　両者の意図せざる逆説的歴史的な関係

19．ウェーバー・テーゼ（『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫）
プロテスタントの職業観　→　カルヴィニズムの禁欲的エートス
　　→　資本主義の精神　→　資本主義の経済システム

20．ルターのドイツ語訳聖書
クレーシス（永遠の救いへの召し＝宗教的生活）とディアテーケー（割り当てられた労働）→ Beruf:世俗的労働＝神によって与えられた使命
　聖と俗の階層性の否定（万人祭司）、職業に貴賤なし、まじめさの意味がある。
だから、人間は働くべきなのである。

21．カルヴィニズム：神の選びにふさわしい生活＝禁欲的エートス　→　生活の合理化

22．資本主義の精神：勤勉、節約、正直、規律といった徳目によって構成された生活態度
　資本主義経済の成立期にその担い手となった新興産業資本家はピューリタンであった（17-18 世紀のイギリス・アメリカ）。
正当な労働に対する正当な報酬としての富は神からの恵みである、公正な市場経済は神の意志を実現するのにふさわしい。
市場と隣人愛、他者の必要のために生産し流通させる。

＜参考文献＞

１．ルター　『キリスト者の自由・聖書への序言』岩波文庫。
　　『ルターのテーブルトーク』三交社。
２．Ａ．Ｅ．マクグラス『宗教改革の思想』教文館。
３．金子晴勇『宗教改革の精神』中公新書、『ルターの宗教思想』日本基督教団出版局。
４．今井晋『ルター』（人類の知的遺産）講談社。
５．金子晴勇・江口再起編『ルターを学ぶ人のために』世界思想社。
６．徳善義和『マルティン・ルター――ことばに生きた改革者』岩波新書。
７．日本ルター学会編『宗教改革者の群像』知泉書館。
８．久米あつみ『カルヴァン』（人類の知的遺産）講談社。
９．渡辺信夫『カルヴァンの『キリスト教綱要』を読む』新教出版社。
　書評的紹介：http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/user/sashina/sub14h1.pdf
10．木塚隆志『トーマス・ミュンツァーと黙示録的終末観』未来社。
11．芦名定道・小原克博『キリスト教と現代　終末思想の歴史的展開』世界思想社。
12．『宗教改革著作集７　ミュンツァー・カールシュタット・農民戦争』教文館。
13．梅津順一『ヴェーバーとピューリタニズム　神と富との間』新教出版社。